

バランディエ (G. Balandier) 教授の談話

「自分の研究をふりかえり見て」

小 関 藤 一 郎

フランスの文化使節として再度来日されたバランディエ Georges Balandier 教授は去る11月10日(木)京都の関西日仏学会で「現代性の社会学の問題」Les problèmes de la sociologie des modernités について講演を行った(小関教授通訳)後、11月11日、千里の民族博物館を訪問後、本学部会議室で、「自分の研究をふりかえって」ということで、自から行ってきた研究の回顧と反省について話された。バランディエ教授は16年前にはじめて日本を訪問し、東京、京都、奈良、大阪、名古屋、伊勢、志摩の各地を訪問し、造船、テレビ、カメラ、自動車、染色などの近代工場を具に視察したほか、京都、奈良、法隆寺、伊勢、志摩などで古い伝統的日本の美と生活を観察しただけでなく、天理では天理教の本部に宿泊し、天理教の教義などについて長い質問を行い、日本および日本文化についてかなりの知識を深めた。その際本学部で「伝統的社会と経済的發展」と題する講演を行った。〔この講演はこの紀要第4号(1962年)に掲載されている〕今回は第二回目の訪問であるが、この16年間における日本の巨大な変化には非常に注目していた。談話の内容は以下のとおり。

「私は16年前日本にはじめて来たが、今回再び日本に来ることが出来、旧友やいろいろの人と会えたことは楽しい。今日は講演ではなく、私が現在まで主として人類学および社会学の領域で研究してきた歩みを回顧してみたいと思う。私の研究してきたのは西欧と開発途上国であるが、最初に現地調査を行ったのは今から約30年前でアフリカのセネガルのダカルである。当時は民族学界などでもアフリカの社会は歴史のない伝統的社会であるという考え方が支配的であった。しかし私が現地調査をして第一に気づいたことはアフリカ社会が伝統的社会ではなく歴史をもつ社会だということである。最初に私が調査したのはセネガルの

レブ族であるが、この社会は単純な社会ではなく、複雑な社会であることがわかった。研究を進めていくと、この社会は非常に異なった構造をもっており、しかもイスラムの影響をうけ、さらにフランスの植民地当局と接触をもってきた。そして、こうした伝統的社会は歴史的で、複雑であるばかりでなく同時に問題のある社会であって、そこには男女間あるいは世代間あるいは貧富間の緊張とか対立などの問題が包蔵されていることが明らかになった。私の経験によると、伝統的社会は孤立しているのではなく、その特性を研究するには外的社会、植民地政権の作用を調べなければならない必要があるのである。そして私は伝統社会の歴史的力動性を研究することが大切であることを学んだのである。

次の段階として、私は中央アフリカ、コンゴ、カメロンなどの研究に進んだが、それは植民化の影響をよりよく測定するためであった。これについての報告は私が *Cahiers Internationaux de Sociologie* の1952年Ⅻ号に発表した、*Contribution à une Sociologie de la dépendance*(従属の社会学の一考察)である。私はそこでセネガルと中央アフリカの二つの調査の経験から非西欧国の政治現象研究に貢献したいという計画をもった。そこでその後間もなく私は *Tiers-Monde* といういくつかの協力による著作を編さんした。それは発展と低開発という副題を付している。そこで、この *Tiers-Monde* という言葉の意味について若干説明を加えておきたい。この言葉は今日では資本主義陣営にもそれと対立する社会主義陣営にも属さない別の世界ということで第三の世界と考えられている。しかしそれは誤解である。私が

Tiers-Monde といったのは実にフランス革命当時の思想家シェイエスの著作「第三身分とは何か」*Qu' est-ce que le tiers-état* からヒントを得たのである。シェイエスはこの著で貴族、僧侶の外にある第三身分についてこういつている。「第三身分とは何か、それは現在では無である。しかし将来は全体になろうとする」と。それと同じように、第三世界は今日ではその力は認められていないが将来は世界の主要な力となろうとしているという意味でこの言葉を用いたのである。それに、この第三の世界を研究することは、発展の社会学にとって重要な意味をもつことを明らかにしたが、この研究で私はこの発展の問題を中心に、社会学者、人類学者だけでなく、人口学者、経済学者、政治学者、歴史学者などによる各種の学問の結合的協力研究の道を開いた。(編著 2, 3) すなわち *étude inter-disciplinaire* 各種研究者の連帯を発揮する道を開拓したのである。

しかし、私が1952年に書いた論文は当時のフランスの当局にとって大きな問題を惹起した。私の研究は全く科学的であったにもかかわらず、そういう物議をかもしることになった。それはとにかく、私はそこでアフリカの異なった二つの部族社会についての比較的研究を行うことに進んだ。その二つとはコンゴ **Congo** の社会とガボンの **Fang** 族についてである。この二つの社会は全く対照的な差異を示していることに気がついた。この二つの社会の相違点は次のようである。コンゴは歴史的には何世紀にもわたって王国として存在してき、西欧ともかなり前から接触をしてきた社会である。それは上下の階級差の強い社会で、政治的・経済的な不平等が著しく残っていた。これに対しガボンのファング **Fang** 族は封建制も知らない民族社会であった。自然状態の平等がずっと存続していた社会ではあるが、しかしそこにも力動性は存在していたのである。この二つの社会はフランスの植民地支配に対して全く異なった反応、対応を示していた。コンゴの場合の反応は宗教的・政治的であって、その指導者は新しい宗教、メシアニズムをつくり出し、それが政治と緊密に結びついていた。フランスの植民地支配に対し、コンゴはある程度昔の王政を順応させ独立のシンボルを用いていた。これに対してファング族は伝統的な

勢力をそのまま続けており、植民地の新しい官僚制に対してもそのまま存続してきたが、主権者もなく、昔のままの農民共同体的な村落が改治を行っていたので、本当の国家組織はもっていなかった。だから、フランスはそこに新しい組織をつくらうとしたが失敗したのである。

このような具体的研究によって、私はアフリカ社会の政治現象に注目することになった。とくに英、仏、葡などの植民地であった国の社会におけるナショナリズムがアフリカの伝統的政治と不可分に結びついていたことを知ることができた。つまり、西欧の植民地支配がこうしたアフリカ社会の伝統的政治に大きな衝撃を及ぼしていたことを私は学んだのである。そうしたことから私が得た発見は、古典的な人類学の考え方、フランスの構造主義などはこのような政治的要因のもつ重要性を十分に考慮していなかったということである。〔この点について後で質問に答えて、バランディエ教授はレヴィ・ストロース **Lévi-Strauss** の構造主義による説明特に最近の一連の神話研究 **Mythologiques** たとえば **Le cru et le cuit, Du miel aux cendres**, 等々は科学的というよりはむしろ文学的であり、しかも未開社会の政治を全く無視したものであり、歴史を認めない考え方に立つものであるから、方法として政治現象を扱うのには全く適していないという批判的回答をした。〕私が30年にわたるアフリカ研究の経験から確信を以て断言できることは、植民地支配の下にあったアフリカ社会の政治的経験は西欧のそれに比べてはるかに多様であり、また西欧のそれと多くの相違を示しているということである。こうして、私が学んだもう一つの重要な点は、アフリカ社会においては宗教現象が政治ときわめて緊密に結びついているということである。だから神聖なものと政治とが一体となっているのである。例えば、コンゴではナショナリズムの運動がメシアニズム(救世主)信仰と結びつき、この新しい教会の創設者は、国民の解放者として新しい組織のモデルを教会に求めていた。その第一の例として、アフリカの1950年～60年における政治的指導者の相当数は政治と宗教家の二つの性格をもっていたことが指摘される。ガーナのエンクルマは強力な政治的指導者で、進歩的アフリカ政治家であったが、他

の一面では彼は農民に対する救世主でもあった。

第三に得たことは伝統的社会における社会的力動性強い力をもっていることの発見である。そこでの政治的参加のメカニズムは全く特殊のものである。そこでは社会関係への投資という慣行が行われている。たとえば、王政だった国で、国王が死ぬと、短期間の間国内の社会関係はくつがえってしまう。すなわち、国王に代り臨時の王が選ばれるが、そのもつ特権、富などは前王と同様で、またその取り巻きの上層者もしばらくそのまま残るが、葬儀が完全に終ると、臨時王は追放され、元の姿に戻る。そして前の慣行は変化されることなく、依然として継続される。

このような調査の結果から得た成果に理論的な試みを行うように進んできたが、私は社会学と人類学という学問のもつ両立性に到達した。つまり、この二つの学問をはっきり区別することは困難で、不可能であるということをはっきり感じるようになった。両者はともに現代社会をとり扱うことができる点で同じ性質のものであると考えられる。何故なら、最も大きい理由は、西欧社会も日本もアメリカも現代社会は非常に急速なあるいは迅速な変化を経験している。それは社会構造、経済生活およびシンボルの面のすべての面に亘っているが、この変化はむしろ加速度的であるといえてよい。だから同一の人間がその一生の間に同時に異なった社会を経験することになっているからである。しかも、われわれは同じ社会に生活しながら、現在では全く別の国にいるような経験をもつのであることはよく知られている通りである。たとえばフランスでも1900年と1960年とでは全く隔世の感のあるような変化が生じている。アメリカでも創始者の開拓者の時代と今日では全く異なっている。マーガレット・ミードは最近世代間におけるこのような変化について研究している。今日このような社会学的研究が多くなっているが、その特別な理由は、現代の社会が急速な変化に対して開かれてきているということと、それを調査する各種の方法が発達してきていることであると考えられる。現代社会のそのような変化、急速な変化とそれに対する研究の特徴は次の三つの点にあると見ることができる。

第一は人間と自然環境が一変してきていること

で、生態学的立場から環境問題に対する研究が専門家によって行われてきている。そこに新しい方法が開招されてきているが、人類学もそうした面に活動の領域をひろげている。それらは従来と異なった活動にあるといえよう。

第二は、社会の発展にともなう、人間の社会関係が一つの危機に直面していることである。たとえば巨大都市の出現は冷たい人間関係を創り出したが、これに対し反共同体あるいは新しい共同体運動が各地でおこっている。ここにも人類学が介入することができるのであって、共同体運動、青年運動などの社会的実験がなされているのに対して、直接効果的な接近ができるのである。

第三は簡単に分析しにくいことであるが、共同体的企図とか集合体の意味づけの問題である。科学、技術あるいは組織の面での合理性は著しく進歩してきたが、それらは現代に生活する人々にとって、包括社会の意味づけあるいはそれえの方向づけを十分に与えていないということである。多くの国、とくにフランスでは今日哲学が新たに一つの流行とさえなっているが、それは包括社会の意味づけを探索する試みの現れといえるであろう。現代社会に意味を与えるには哲学者の努力だけでは十分ではない。各種の社会的実験が行われているのもそうした企図であるといえるであろう。人類学はそれらに対しても解釈を与えていくことができるのである。アメリカで最近正統派宗教で新しく厳しさを求める動きが出ているが、それらはアフリカやメラネシアなどにおいて見られる救世主宗教(メシアニズム)と深い類似点をもっている。新しく変わってきた社会に意味づけを求めようとする実験がフランスでも現れている。それは歴史的に古い地方文化の再興をはかろうとするもので、プロヴァンス、ブルターニュなどに見られるが、それはフランスの国民的文化が衰退してきて、地方住民に対して十分の意味を与えなくなっているために起きた反応である。つまり、そうした事態に応じて、歴史的に地方に根をもつ文化がその空白をうめようとする動きが生じてきたのである。それはたんなる民俗 *folklore* というものではないのである。

以上のべたような理由で、現代社会は社会学と同じく人類学も研究を進めていくべき対象となっ

ているのであって、それは人類学の伝統から見ても決して誤った道ではないのである。

今日は最初から講演ということではなく、私の歩んできた道を反省した覚書き程度のことを話して、皆さんの質問をうけたいと思ったが、2時間以上も話してしまった。だから、今日は *conférence* (講演)ではなく *confession* (告白)に終ってしまった。私の結論としていべきことは、私が行ってきた調査研究を科学的モデルとして話したのではなく、現実の世界に対する私の今日的意識がどのようにうごいてきたかをお話したのであるということである。実際の問題としていえば、私は人類の社会学を企図していたのであるといえよいのであろう。

「以上11月11日のバランディエ教授の話の内容を通訳にあたった小関藤一郎教授が通訳にあたってその場でとったノートをもとにしてまとめたものである。長時間の話であったのと、ノートは不備なところだらけであるため、若干の脱落はあるかも知れないが、その点は原稿がない話であることに免じて御容赦いただきたいと思う」。

G. Balandier 教授の主要著作

著 作

1. *Sociologie actnelle de l'Afrique noire*. 1955, 2^e édit. 1963.
 2. *Sociologie des Brazzavilles noires*. 1955.
 3. *Afrique ambiquë*. 1957.
 4. *La Vie quotidienne au royaume Kongo du XVI^e au XVIII^e siècle*. 1965.
 5. *Anthropologie politique*. 1969.
 6. *Sens et Puissance*. P.U.F. 1971.
 7. *Georges Gurvitch, savie, son œuore*, P. U. F. 1972.
 8. *Anthropo-logiques*. P. U. F. 1974.
 9. *Histoire des Autres*, Stock. 1977.
- (この中とくに6.は社会変動の問題について重要な研究論文を含んでいる)

編 著

1. *Le "tiers monde" : Sous-développement et développement*, P. U. F. 1956., 2^e édit, 1962.
2. *Changements techniques, économiques et sociaux*, P. U. F, 1959.
3. *Les implications sociales du développement économique*, 1962.
4. *Dictionnaire des civilisations africaines*, F. Hazan, 1968.
5. *Perspectives de la sociologie contemporaine*, P. U. F. 1968.
6. *Sociologie des mutations*. Anthropolos, 1970.
7. *Questions à la sociologie française*, P. U. F. 1976.